

---

# FortePiano

無無無

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fortepiano

### 【Nコード】

N4819BA

### 【作者名】

無無無

### 【あらすじ】

少年がいました。彼は天涯孤独の身でした。親はおりませんでした。代わりにホームレスのおじさんがおりました。おじさんはホームレス狩りに殺されました。そして少年は。突如全世界の人間に起こった進化ともいえる変異。その可能性の一つ、超能力。そんな、超能力がありふれた世界における物語。初投稿です。みなさんが某猫型ロボットのような温かい眼で見守ってくださいと幸いです。

## prologue (前書き)

どうしてこうなった。

いや、小説を書くと言うのは、本当に難しいものですね。他の作者様が毎日投稿しているのを見て、本当に感心します。私にそんな気概は生まれてこなんだ……。

冒頭のどうしてこうなった、は、多分初めて小説を書く方ならだれでも感じるだろう(勘)、思い描いていた物語と、自分の語彙能力の低さによる表現の薄さ。

思わず笑いましたよ。くふふ、と。

さあ、それでもいいという方は、どうぞこのまま。

無理、無理ですう！ という方は、このまま下に逝って目次で戻ってください。

え？ 誘導？

なんのことでしょう？ 私にはさっぱり分からず

では、ゆっくり読んでいってね！

## prologue

クリスマスのサンタを信じている人間がこの世界にあとどれくらいいるだろうか。最近では小学生になる以前から信じていない子供もいるらしい。本当にサンタはいるのだが。

そんな中、高校生になっても信じ続けている十六歳男児がいた。というか、本当にいるのだが。

その少年は、一人身。両親の顔は見たことがない。兄弟すらいない。親戚すら誰も知らない。天涯孤独の身。というより、育てられたのがホームレスのおじさんで、気付けばそのおじさんのことを父親だと思っていて、本当は違って、しかし優しい男性で、だけどホームレス狩りで殺されて、七歳の時に孤児院に入った。

他の人間と違うのは、それだけ。たったのそれだけだった。

「今年はサンタ、来るかな」

十年間。ホームレスのおじさんが死んでから、一度も。

そんな彼が今年のサンタに願ったことは、少しだけ切なくて少しだけ贅沢なお願ひ事だった。

「まあ、無理だろうな、いくらサンタでも」

信じていると言っても、ほとんど無理矢理。信じているのか信じていないのか、あやふやな状態だった。

十年間同じ願ひ事。

はつきり言って、サンタに頼むものではない。

「『家族をください』なんて、どこの阿呆が頼むんだよ……あ、僕か」

|| || || ||

「あまみや ついま雨宮終真。『アビリティテスト能力検査』。

CASE・PI

TYPE・エレクトロユーザー雷撃使い

RANK・B

只今より、『アビリティテスト能力検査』を開始します」

ビーツ！ というけたたましい音とともに、優男というふうな印象を受ける少年が視界の隅より飛来した円盤状の物体に向けて腕を伸ばした。

少しだけ力んだ素振りを見せた次の瞬間、少年の手の平から青い光を放つ雷が円盤状の物体に放たれた。

雷が直撃した円盤状の物体は黒い煙を上げ破裂する。

「RANK・Eクリア。続いて、RANK・D。スタート開始」

女性の平坦な声の後に、今度は四枚の円盤状の物体が四方八方から少年の視界へと入って来た。

しかし少年は、今度は両手を使って瞬時に撃ち落とす。

その次は十六枚。その次は四十枚。そこまでは本当に擦れ擦れのところでクリアできた。

だが、次の試行では、百枚の円盤状の物体が飛来したところで、少年はかなりの数を撃ち漏らし、「終了」という平坦な女性の声が響く。

「あまみや ついま雨宮終真。『アビリティテスト能力検査』。

CASE・PI  
Eレクトロユーザー  
TYPE・雷撃使い

RANK・B

これで『アビリティテスト能力検査』を終わります」

「……ふー、お疲れさまでしたっつと」

少年、雨宮終真は額に滲んだ汗を拭いながら、律儀にも礼をした。少し癖のある髪が冷たい風にふわりと踊った。そんな彼に、横から近づいてくる影がある。

「終真ー。今回はどうだったよ？」

「前と変わらず、B判定だよ」

「普通だな」

「普通ですよどうせ。そんな江崎智也くんはどんな判定だったの  
「ございましょうね」

「……B」

「普通だな」

「普通で悪かったな！」

『アビリティテスト能力検査』は、全世界の人間が一年に一回は試験しなければなら  
ない、国が定めた体力測定のようなものだ。受けなかった場合は、  
少なからず罰金を科せられ、強制的に受けさせられる。検査自体は  
無料で、あくまでも国が行っていることだ。

そんな中、学生は年に三回。学期ごとに受けるのが通例となつて  
いる。その中の学生の二人が、終真と智也だった。

終真と智也の付き合いは、はっきりいつてかなり長いものになる。  
幼い時期、というものがいつまでなのかは明確には分からないが、  
言ってみれば幼馴染だろう。小学校一年からなにかと気が合う友達。  
いや、親友なのだろう。

「終真。ほれ、あそこ見ろよ」  
「どれどれ」

智也が指さした先には、この学校のエース。たしか、冬月<sup>ふゆつき</sup><sup>こたけ</sup>大といふ生徒が、今まさに『<sup>アビリティテスト</sup>能力検査』を受けていた。

能力のタイプは、<sup>エアロマスター</sup>風力操作。オーソドックスな能力ではあるが、彼、冬月<sup>ふゆつき</sup>大が使用する風は、そこら辺の学生が使うそれとは一線を画していた。

だが、注目すべき点はそこではない。  
<sup>ふゆつき</sup>大の周りに群がる女子生徒の山である。

「……なあ、終真」

「なんだよ、智也」

「俺たちって、泣いてもいいと思うぜ」

「泣けよ。ちなみに僕の胸は貸さねえ」

ルックスは、茶髪でそれがよく映える面長の綺麗な卵型な顔。すらりとした伸びた体軀は細いが、決して頼りなさを覚えるものではなかった。むしろ、筋骨隆々とした筋肉共よりも迫力に満ちている。それでいて、人当たりがいい。

女子にモテる条件の参考書が、二人の憐れな少年の前に居た。

「格好良くて頭が良くて　その上、能力のランクもあつちが絶対的に上。勝てる要素が一つも見当たらない」

「能力値で負けてても、その他で一つでも勝っている部分があったら救われただけだな」

人間に訪れた、一つの進化。

その中の具体的名称は、昔の人間がよく憧れ、テレビ番組ではもてはやされ本には登場し多くのベストセラーを生み出した、一つの

要素。

超能力、という、一つの進化だった。

始まりは、一人の少年に起こった悲劇。それに伴う、人間の遺伝子に起こった変異。

ウルトラヒーロマン  
特異性能力者と科学的に定義されているが、一般呼称は超能力者。ヒトという生物の枠組みは、果てしない未知へと広がった。

それが、この世界の人間という存在。二十二世紀を越えた未来の、現在である。

「冴大のランクは、どのくらいだったっけかな？」

「S。多分、すっげえモテる、のインシャルだ」

そんな能力者の枠組みの中でも、列記とした格差が存在する。

RANK・EからRANK・SSSまでの八段階評価で、その人間の能力強度が表記される。

RANK・EとRANK・SSSの同じ能力を使う人間が相対すれば、奇跡が起っても勝てる見込みは京けいに一ほどしかない。だが、能力者同士の決闘は国の法律によって制限されている。それはもちろん、超能力者の出現による人々の犯罪の増加、およびそれに伴う死傷者の激増が原因である。誰しも、手に入れた力は振るわなければ気が済まない。

智也はムカムカして歪んだ顔で、「うがうが」と呻っていた。

「二人がかりでフクロにすっか」

「超能力行使制限法、対人に攻撃性のある能力を行使した場合、嚴重な処罰を与える。ただし、防衛に関してはその限りではない。誰でも知ってる常識。っていうか、こんなこと知らなくてもSランクの奴に喧嘩売る馬鹿なんていないだろ」

「ここにいるだろ？ つういーまくうん？」

「あれ、おかしいな。さっきまでここにいたはずの智也くんが消失



してしまっただではないか。お得意の瞬間移動テレポートでも使ったのかな？

ならば、さつき智也くんが喧嘩売ってたよって、冴大くんに知らせなくちゃなー」

「お前は鬼か！ 俺の存在感もろとも実体の俺含めてこの現世から消そうとしやがった！」

「失礼な。鬼神と呼んでくれたまえよ」

「格が上がったッ!？」

これが男子高校生で、さつきまでの話題がいきなり変わるなんてことは日常茶飯事である。

そこで終真が、少し訝しげな表情で目を細める。

「今日はやけに噛みつくな、智也。昨日までは、『ハン、イケメン爆発しろ』程度だったのに。それに智也、お前は彼女がいるじゃないか」

「……………終真。お前は人の傷口を抉る天賦の才があるよ」

「……………まさか」

智也は先程までの怒りに顔を紅く染めた表情とは違って変わり、急になにかを悟ったかのような表情になった。フツ、と溜め息を漏らしながら、軽く膝を抱えた。

「お前の想像を超えるぜ、終真。本当、自殺した人間の気持ちがよく分かる」

なんだかおちゃらける場面でもないようなので、終真は下視方向斜め四十五度ほどに視線を向け、そっと耳を向けた。もちろん、笑いを堪えながら。

だが、次に智也が口にした言葉は、終真の想像を遥かに超えるものだった。

「……別れた。そして彼女は今あの群れの中に居る」  
「……………」

言葉を出すのも躊躇われる。本当に、なんて不幸な男なのだろう。よもや、嫌っている男に寝とられてしまうだなんて、それはそれは辛いだろう。まあ、冴大が手を出したのではなく、単純に彼女の方が冴大に走ったのだろうか。

終真と智也は、二人して膝を抱えたまま、魂の抜けるような溜め息を漏らした。

## prologue (後書き)

ご感想だとかくださると、非常に作者のテンションは上がると  
思います？

稚拙な文を読んでくださってありがとうございます。

次回もまた、この小説に目を通していただければ幸いです。

## 1 - (1) 馬鹿な後輩

放課後、智也と帰り道で別れた後、少しため息をつく。

「はーあ。またも進展なしかあ……。結構努力はしてるつもりなんだけどな」

十二月の澄んだ空気に帯を引く夕焼けが、終真のノスタルジックな感情を持ち上げてくる。実を言えば、今日は学校てんぶぎ 天吹学園の二期終業式だったわけだ。終業式に「アビリティテスト能力検査」を行う理由は、いくつかある。

そのうちの一つに、長期休暇時に気を緩めず自分を見つめさせるためというのがあるだろう。超能力者にも、才能というものがある。昼間の冴大も含め、Sランク以上は化物だ。才能の壁は、すなわちランクそのものとも言えるだろう。

だが、努力を怠らなければ、少しずつでもランクは上がる。終真の課題は、命中精度だろう。威力は申し分ない、と成績表には書いてあるし、自分でもそれは分かっていた。なので、能力専用トレーニングルームに通ったり、いろいろ努力はしているが、なかなかランクが上がらない。

「ま、いんだけどさ、別に」

能力の強度の良し悪しがそのまま社会的地位格差に繋がるわけではない。

会社のビルの中で、パソコンに向かってせっせと仕事に勤しむデスクワーカーがいたとしよう。

そんな彼は、Sランクの超能力者である。国からの評価は、もはや名誉国民賞に選ばれてもおかしくないほどの超能力者である。

だが、それは生粹のデスクワーカーである彼には、あまりにも意味が無いのだ。

そう。

超能力による就職や社会的立場はたしかに優遇されてはいるが、それが本質的な社会的地位格差に繋がるのは、ほんの一部の特例のみである。優遇措置を得たい超能力者は、是非、そういった能力を活かせる場で働いた方がいいだろう。そんなことは、超能力がある無しに関わらず、当たり前のことだ。

なので、終真はあまり能力の差を気にしていない。

超能力による犯罪はあまり起っていないし、起ったとしても、公安直属の高位超能力者がいるので犯罪の拡大は起きない。

安全な国。それが、百年以上続いている日本という国のイメージだ。

「やつと見えて参りましたよ、我が家が」

一軒家。終真を七歳の時まで養っていたホームレスのおじさん。ホームレス、といってもその生活はまだ裕福な方で、その理由として挙げられるのは、彼が念動力サイキッカーだったのが大いに関係するだろう。そのおかげで、生活費にはギリギリ困っていなかった。律儀にも、生命保険にも入っていたようだった。どうしてホームレスなのかというと、定位置につくのが嫌いだったというのは、終真が成長してやつと分かったことである。

そして、ホームレス狩り。十人以上の超能力者に囲まれて、『社会の汚物は消毒だあ』『さっさと消えろゴミ』などと喚く若者に散々な殺され方をした。そのあと、眩い閃光があたりを包み込んで。

と。それで、超能力行使制限法に触れた超能力者達から慰謝料を多額に支払われ、おじさんの残した生命保険料も、そのまま後継人ということにいつの間にかなっていた終真に振り込まれていた。そ

の事実を知ったのは、中学を卒業した直後、孤児院のマザーから通帳とともに話された時だった。

なので、余裕で一軒家を購入できたわけである。

「ただいまー」

玄関にばばーいと靴を脱ぎ捨てると、玄関横にある階段を上り、自分の部屋のドアを開ける。

制服を脱いで、ハンガーに吊るし、ワイシャツを脱ごうとしたその時、下品な笑い声が彼の耳に届いた。

終真は呆れ顔で部屋を見渡す。だが、人影は無い。だが、気配は確かに感じる。

そこで、脳での生体電流のやりとりが若干おかしいことに気がつく。目から入ってくる情報と、脳で演算されている情報とが合わない。そんなところに気付くのは、彼が雷撃使用であるからだ。

終真は溜め息をつくと、肩甲骨あたりから同心円状に不定の電磁波を流した。

視界にノイズのようなものが奔ったかと思うと、その光景は一気に崩れ、そしてまたいつも同じ部屋が現れた。

ベッドの上で四つん這いになり、涎を垂らしながらこちらを眺めてくる茶髪少女の姿さえなければ、の話だが。

「…………ぐへ、ぐへへ」

「…………やっぱりお前か 杏里<sup>あんり</sup>」

「ぐへ、へ？ あり、解けちゃってます解けちゃってます！？ ポクの渾身の出来だったビジョンバリアフィールドが！！」

たしかに、電気を使う能力者でなければ、もしくはよほどの戦闘のプロではない限りは、気付くことは出来なかっただろう。

だが、彼の超能力のタイプは雷撃<sup>エレクトロユーザー</sup>使用いだ。目から入ってくる情報



「反省したか？」

終真の視線の下では、びくびくとしながら身体を跳ねさせている杏里という少女がいる。

終真だって、馬鹿ではない。本当に殺すつもりなどはないし、逆説的に殺そうとしたら彼女の肉や皮は一瞬で蒸発していただろう。それに、電流はほとんど流していない。

今では誰も知っているような常識で、かなりの電圧を持つ電気に撃たれても人間は意外に平気で、しかしながらコンセントに指を突っ込んで感電すれば死んでしまうこともある。それだけでも電流の脅威が分かるだろう。

だからと言って、彼は百万ボルトの雷撃を浴びせたわけではないし、軽いスタンガン程度の電圧だった（五万ボルト程度）。

「あへ、あへへ。先輩の愛撫う」

「……変態」

「罵りすらも快感につながるのですよ先輩！ さあ、もっとボクのことを罵ってください！」

「次は電流高めにするかね」

前髪の前から青白い雷がバチリと奔る。杏里も命は惜しいのか、にへらと笑い、「冗談ですよ冗談」と、口元に手をやってぶくくと笑いを押し殺していた。

本当にぶっ飛ばしてやるつか、などと物騒なことを考えながら、終真はベッドに腰掛ける。

「で、杏里。なんで僕の部屋に勝手に入ってんだよ」

「そこに先輩の部屋があつたから！」

「そこに世界があるからのかな？ 魔王みたいなこと言ってんじゃねえ！」



「ふへへ〜。先輩のベッドはいい香りかほがするのですなあ」  
「嗅ぐなッ！」

ベッドに置いてある枕に顔を埋めている杏里を強制的に引き剥がす終真。

てんやわんやのやり取りの中、終真は心の中で溜め息をつく。

遊間杏里ゆま あんり。現在中学校三年生、受験生。お隣さん。変態。変態。

「杏里。空いてる部屋は好きに使っていいから、せめて僕の部屋には入らないでくれよ」

「でも、帰って来た時は空いていたのですぞ？ 使ってはいけない道理などないはず」

「ありまくりだバカ」

「ふ、ふへへ。ツンな先輩萌え萌え」

「……なんで僕はこんな後輩を持ってしまったんだろう」

現在高校一年生の終真と現在中学三年生の杏里。もちろん、杏里の志望校は終真が通う天吹学園である。ちなみに天吹学園の偏差値は五十五。普通よりもちょっとランクの高い学校だ。

その学校に、この馬鹿っぱさうな後輩は挑戦しようとしているわけだ。現在は十二月の二十日。受験まであと二ヶ月ほど。終真は彼女のお母さんから、「面倒見てやってね」と頼まれているので無下にはできないしするつもりもない。

「残り二ヶ月。約六十日でお前を頭脳明晰にしてやんよ！ ついでに性癖も完璧に消去してやる」

「ぷりーず たつちみー！」

「違、わない！？」

触ってくださいとか、どこをだと問い詰めたくなるが、ここは我

慢。時は一分一秒を争う。

「勉強道具を持ってこい。それなら生命活動を維持したままこの部屋に居ることが出来るぞ」

「イエッサー！」

嬉々とした表情で走り去っていく杏里の後ろ姿を眺めながら、彼女の着ている服にふと気付く。

あれ、僕の制服じゃね？

天吹学園の制服、藍色を基調としたブレザーを中学の制服の上に羽織ったまま駆けだしている。っていうかいなくなった。

と思っていたら、「せんぱあい」と窓の外から気の抜けた声が聞こえた。

どたどたと窓の方に歩いていき外を見ると、がぼがぼのブレザーに腕を隠されてひよこひよこしている杏里の姿があった。

「今年はボクと一緒にクリスマス過ごしましょうねーっ！」

「制服返したらな」

「ブラでもパンティでもあげますから、お願いですぞ！」

「黙れ変態！」

閑静な住宅街ではあまり聞き慣れない応酬が、二人の間で繰り広げられていた。

時刻は午後六時。すでに太陽は、落ちていた。

1 - (1) 馬鹿な後輩（後書き）

超能力系の小説でよく見かける、能力が強ければ強いほど社会からの待遇はよくなるって、なんか違和感を覚えるんですよ。

もちろん、そこが戦闘民族が暮らしている国で、人間の価値「能力強度」ということならなんの違和感も覚えませんが、普通戦争をやっていない国からすれば、そんな社会体制ただの蛮族にしか見えないんですよ。

超破壊的暴力を持っている超能力者。

平和な日本にいれば、ほとんど無用の長物ですよ。

それと同じです。

あれ？ 何が言いたいのがよく分からなくなってきたぞ？

ま、まあ、まとめてみると、能力絶対主義国家ではないということですよ。

戦闘能力 社会的地位 ドラゴンボー を思い出しました。悟 あんなに強いのに金に困ってるっばいですね。

まあ、「にするととなると、地球じゃなくサイ 人の星じゃないと無理でしょうね。

ご感想なんかくだされば、非常に嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4819ba/>

---

FortePiano

2012年1月14日01時50分発行